



## 室蘭市図書館 (1/2)

室蘭（むろらん）と聞いて何を想像するでしょうか？

そもそも北海道のどの辺？何が収穫できるのだろう？

本州の方で北海道の知識があまりなくても、室蘭という地名は聞いたことあると感じる人もいるでしょう。室蘭は北海道内ではとても個性の強い町、コンテンツの多い町だと思っています。図書館のこと書くまで少し時間がかかります。町について書かせてください。

室蘭市は西胆振（いぶり）の拠点となっている町です。ちなみに東は苫小牧市です。

札幌から特急で直通2時間もかからずに行くことができます。しかし本数が少ないので、東室蘭駅で各駅に乗り換えないと行けない場合が多いです。私は今回東室蘭駅から列車ではなく、市内循環バスに乗り換えてみました。市内を迂回しますが、町並みをゆっくり眺めることができます。

室蘭は札幌から函館に向かう途中にある町です。人口は74,000人ほど。道内の市としては歌志内市、砂川市に次いで81㎢ほどの小さな面積にも関わらずというのが室蘭です。人口密度が道内で札幌に次いで2番目に高いので人が結構いるように感じます。道内で人口密度を感じる町って他にどこがあるでしょう？人口減少問題を抱えているにも関わらず。

とにかく北海道をイメージする場合の風景とは異なります。港町なので坂も多い。しかし小樽や函館とは景色は違う。

なぜか？工業地帯だからです。鉄鋼で栄えた町なので日本製鉄、日本製鋼所、ENEOSなど、工場のいわゆる「むろらん夜景」を眺めることができます。このような景色は北海道では珍しいです。工場夜景の川崎市の呼びかけで四日市市、北九州市そして室蘭市が「全国工場夜景エリア」として2011年に共同宣言を採択し以降全国に広がりました。

室蘭といえば地球岬をイメージする方もいるでしょう。絵鞆（えとも）半島最南端で太平洋を一望できる100mほどの断崖絶壁岬です。そこでいつものように疑問がわきます。なぜ「地球」なのでしょう？「太陽」や「月」ではなく「地球」です。いつものように角川日本地名大辞典「北海道編」を頼りにします。地名は「チケウエ」に由来し、知里真志保（言語学者）は「チケブ・削れたもの（断崖絶壁）の転訛とする」と綴っています。ちなみに知里真志保の姉は『アイヌ神謡集』の著者知里幸恵です。

地球岬の近くに「炎の毒まんじゅう」という饅頭が売られていたのをご存知でしょうか？2020年、あいにく閉店してもう入手できないのですが、ごく普通の饅頭6個入り。でも、その中に1個すごく辛い唐辛子入りの饅頭が入っています。食べ方はまさにロシアンルーレットです。

寄り道はこのぐらいにして図書館に参りましょう。

「市役所前」「市役所北」のバス停から徒歩5分。室蘭駅から徒歩10分ほど。図書館は、市役所の向かいで、隣には市立室蘭総合病院という立地にはとても恵まれています。駐車場にはなんと大型バス4台も駐車できる広さ。

2021年12月、市青少年科学館と市立室蘭図書館本館を受け継ぐ合築施設として、DENZAI環境科学館・室蘭市図書館（愛称「えみらん」、地元企業のDENZAI(株)が命名権取得）が開館しました。コロナ禍での開館だったので制限されたセレモニーだったようです。

「えみらん」の由来は、Environment（環境）、Science museum（科学館）、Library（図書館）と、室蘭の「らん」を組み合わせたもの。

朝10時近くになると子供連れの家族が「えみらん」の前で開館を待っています。開館すると2階にあるDENZAI環境科学館へ一目散！この施設で遊ぶのが目的です。「あそんでまなぼう」をコンセプトにしているので、施設で遊ぶ、イベント参加などちょっとしたテーマパークです。

図書館は1階にあります。

配架図を見ると館内の形は、人の耳のような形をしています。出入口すぐにカウンターがあり、ちょうど鼓膜あたり。建物の外側が耳のように丸くなっています。耳たぶは児童書の「おはなしのへや」。耳の穴の周りを中心に書架が扇を開いたように並んでいます。このような扇のような設営は、道内なら日高門別の児童書コーナーや余市などいくつか見たことがあります。道外でもあるのではないのでしょうか？

本館の魅力の中で郷土資料コーナーは学芸員が管理していることもあり、詳細に作られています。炭鉄港（たんてつこう）についても大きく展開しています。道内の図書館で一番大きい常設コーナーでしょう。炭鉄港は、空知の炭鉱、室蘭の鉄鋼、小樽の港湾という北海道の近代化を支えた産業遺産です。2019年5月に文化庁が選定する「日本遺産」に認定されました。

空知、室蘭、小樽それぞれから産業遺産の施設ツアーなども実施しています。

（後編に続く）

2025年6月訪問

加藤 重男